

令和 4 年 8 月 30 日現在

機関番号：82621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00201

研究課題名（和文）戦後日本の前衛美術のクロス・レファレンス的研究 1945-1955

研究課題名（英文）A Cross-Reference Study of Postwar Avant-Garde Art in Japan, 1945-1955

研究代表者

大谷 省吾 (Otani, Shogo)

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・美術課・主任研究員

研究者番号：90270420

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年国際的な注目を集める戦後日本の前衛芸術運動の実相を実証的に明らかにするために、1951年に東京で結成された前衛芸術グループ「実験工房」の中心人物のひとり山口勝弘（1928-2018）の日記（1945-1955）をデジタルデータ化した上で書き起こし、記述された内容を他の関係作家の資料や公刊資料によって裏づけをとりながら、比較検証した。書き起こした日記とその解題を刊行し、また当該分野の研究者を招いてのシンポジウムや展覧会を開催して、戦後日本の前衛芸術についての新たな研究方法について課題と展望をまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後日本の前衛芸術運動については近年国際的な注目が集まっているが、戦後まもない時期については刊行物が少なく、また関係者の高齢化、他界によって、聞き取り調査にも限界がある。本研究はそれに対し、関係者の日記などの一次資料を活用しつつ、他の資料との比較検討によって事実関係を実証的に跡付けるという研究手法を提案するものであり、この時代の美術あるいは文化全般を研究しようとする今後の研究者に広く参照価値のある基盤を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：In an attempt to elucidate the reality of the avant-garde art movements in postwar Japan that are attracting international attention in recent years, this study focuses on the diary from 1945 to 1955 of Yamaguchi Katsuhiko (1928-2018), one of the key members of the artist group Experimental Workshop that was formed in 1951 in Tokyo. We digitized and transcribed the diary. This study examines and verifies its contents by checking them against the materials about related artists and contemporary publications. We published the transcription with explanatory notes, held a symposium attended by researchers in the field, and outlined the challenges in, and an outlook on, new ways of research on postwar avant-garde art in Japan.

研究分野：日本近代美術

キーワード：戦後日本美術 前衛美術 アヴァンギャルド モダンアート 実験工房 山口勝弘

### 1. 研究開始当初の背景

戦後日本の前衛芸術に対する関心は、近年、国際的にますます高まってきている。例えば展覧会としては「TOKYO 1955-1970 NEW AVANT-GARDE」(ニューヨーク近代美術館、2012年)をはじめ、「The Emergence of the Contemporary: Avant-Garde Art in Japan 1950-1970」(パソ・インペリアル、リオデジャネイロ、2016年)あるいは各論としては「実験工房展」(パリ、ベトンサロン、2011年)、「具体：すばらしき遊び場」(グッゲンハイム美術館、2013年)など数多い。日本国内でも「具体」グループについては2012年に、「実験工房」については2013年に、それぞれ大規模な展覧会が開かれている。

こうした国内外における、戦後日本の前衛芸術への注目の高まりは、従来あった西洋中心主義的な美術史観の相対化が進められる中で、日本の近現代美術への一種の偏見 西洋近代美術の模倣、亜流 が次第に払拭され、むしろ戦後日本の前衛芸術がはらむ特殊性、すなわち第二次世界大戦後にドラスティックな価値観の変動が起こった社会状況の中での、独自の表現の模索に、あらためて光が当てられたためと考えられる。日本国内においても、戦後50年を過ぎたあたりから、戦後美術を客観的に回顧する動きが進みつつあり、とくに近年は関係作家・批評家・収集家・画商の高齢化、あるいは逝去によって、歴史化の作業は喫緊の課題となりつつある。

しかし、これまでの戦後芸術全般の研究には見逃せない問題点もあった。第一に占領期(1945-52年)にはプレスコードがあり、とりわけ印刷・出版事情の悪さから、芸術家の当時の詳しい活動が十分に活字化されていないこと(長らく占領期文書のアクセスが限定されたことも含めて)第二に、近年すすめられつつあるオーラル・ヒストリー・アーカイブ(関係者からの聞き取り)は、長期間をおいての回想のため正確さを欠く上に、どうしても話し手の都合のよいように語られがちであり、事実が歪曲される場合が少なくないということである。聞き手の側も、第一の問題点が強く影響しているのであるが、作家の発言の信憑性についての粘り強い検証作業をおろそかにしている面が否めない。

### 2. 研究の目的

本研究は、上記の問題を克服するために、当時の関係者の日記や書簡といった一次資料を中心的な調査対象とする。これらの資料からは、公刊資料からは知りえない人間関係や作家の本音、あるいは当時の重要なイベントに誰が参加したかといった参加者視点の情報など、戦後日本の前衛芸術の、ムーヴメントとしてのうねりのようなものを捉えることが可能となる。個人の日記や書簡などには主観的な偏向や誤記もありうるが、記述された内容を他の作家の資料や数少ない公刊資料と比較検証(クロス・レファレンス)することで、事実関係を実証的に跡付け、個々の事象を複数の視点から立体的に見つめることができるだろう。この作業を通して、本研究は当該分野の研究基盤を整備しようとするものである。

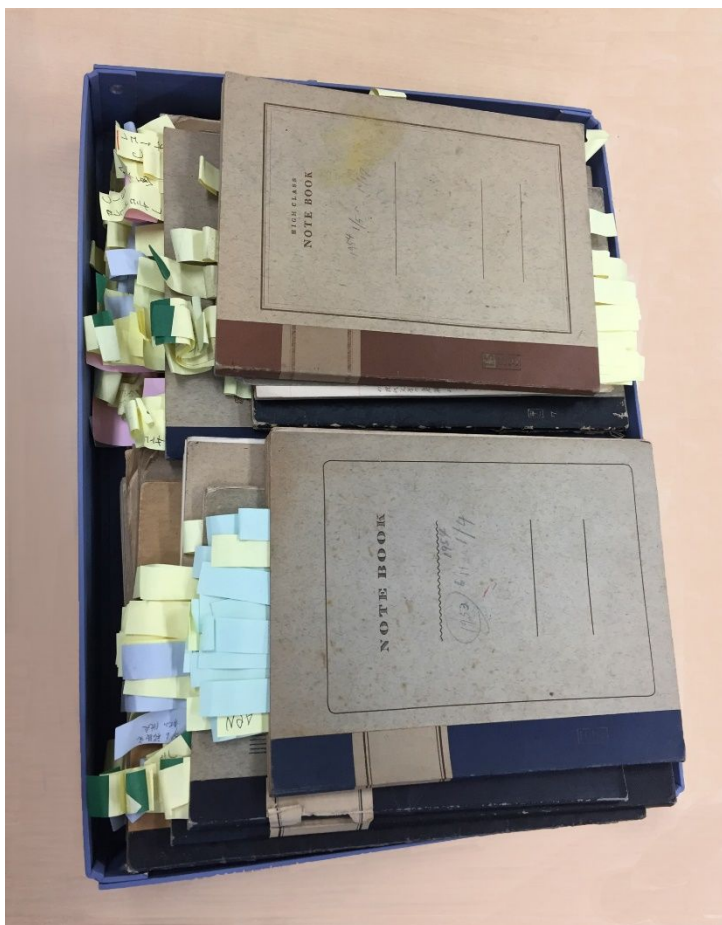
### 3. 研究の方法

研究の主要対象として、1951年に東京で結成された前衛芸術グループである「実験工房」の主要メンバーであった山口勝弘(1928-2018)の、1945年から1955年までの日記をとりあげた。実験工房は、詩人・美術評論家の瀧口修造を名付け親として、美術(北代省三、山口勝弘、福島秀子、駒井哲郎)音楽(武満徹、鈴木博義、福島和夫、湯浅譲二、園田高弘、佐藤慶次郎、秋山邦晴)写真(大辻清司)照明(今井直次)技術(山崎英夫)というように分野をまたいだ若手芸術家たちによって結成されたグループであるが、多ジャンルであるがゆえに包括的な研究が遅れてきたのも否めない。その中で、主要メンバーの山口は、造形作家として活動だけでなくグループの会合や、さまざまな展覧会、コンサートや映画、読書などの鑑賞記録もまめに日記に記している。

この山口勝弘日記は1945年から1955年まで18冊に分かれているが、初年度にあたる2018年度はその全ページをスキャンしてデジタル化を行い、書き起こしを行った。2019年度には書き起こし作業を進めるとともに、各研究分担者がそれぞれ担当する時期の日記を読み込み、新知見の整理を進めた。2020年度は、判読の難しい箇所への検討や、公刊に向けた表記の原則などについて意見交換を行い、また記述内容を、同時代の他の作家の資料や数少ない公刊資料等で跡付ける作業を進めた。さらに、同時代の他の芸術家について研究している外部の研究者を招いて2年目に意見交換会、4年目にシンポジウムを行った。4年目にはまた日記に言及されている事項を作品と資料でたどる展覧会を神奈川県立近代美術館鎌倉別館で開催するとともに、日記の翻刻と解題、シンポジウムの報告書を刊行した。

なお山口勝弘氏は研究を開始してまもなく逝去されたが、弟の裕康氏の全面的な協力のもと

研究を継続することが可能となった。裕康氏からは日記の難読字への助言、記述された親族・友人関係の情報などのご教示をいただいた。



図：山口勝弘日記

#### 4．研究成果

山口勝弘日記の調査から、戦後まもない時期の日本の芸術家たちにとっての重要な情報源としてのCIE（連合国軍総司令部民間情報教育局）図書館の重要性があらためて具体的に浮かび上がる他、実験工房をはじめとする当時の前衛芸術家たちの人間関係や、美術にとどまらず他分野との交流についても知る事ができた。CIE図書館では、とくに山口に大きな影響を与えたモホイ＝ナジの著書を山口がいつ読んだかが明らかになり、山口自身の造形活動の展開を実証的に跡付けることが可能となった。

これら新たに判明した事実については、最終年度にシンポジウム「戦後日本の前衛美術の新たな研究にむけて」（2021年11月14日、東京国立近代美術館講堂）を開いて報告した。また、このシンポジウムには外部の研究者を招き、大日方欣一氏（九州産業大学）には、同じく実験工房に参加した写真家である大辻清司の残した記録写真の解説という研究アプローチについて、加藤瑞穂氏（大阪大学総合学術博物館）には、同時代に関西で活動した前衛芸術グループである「具体美術協会」の作家の日記の事例などを報告していただいた。それらの報告をふまえて、戦後70年を過ぎた現在、この時代の美術をどのように研究していくべきか、その課題と今後の展望について、他の美術館や大学の研究者たちもまじえて議論を行った。議論においては、アーカイブにおけるネガフィルムの整理方法や、日記や書簡などにおける、プライバシーに関わる記述の扱いの問題、また他機関で所蔵している他の作家のアーカイブとの今後の連携の可能性などについても話題となった。シンポジウムの記録は報告書としてまとめ、また山口勝弘日記の翻刻と解題を刊行し、今後の研究者に有効に活用してもらえるようにした。

締めくくりとして神奈川県立近代美術館鎌倉別館で開催した展覧会（2022年2月12日～4月17日）では、山口勝弘日記およびそこで言及された作品によって会場を構成し、実験工房メンバーの集合写真と、その集まりの日付にあたる日記の内容を照合させて撮影場所を推測したり、山口勝弘の代表作シリーズである「ヴィトリヌ」（モールガラスを用いたレリーフ状の作品）の構想プロセスを、日記と作品とで辿ったりした。日記を介して、作品と資料とが有機的に連関する展示を実現することができた。



図：シンポジウム（左から大谷、西澤、加藤、大日方、五十殿）



図：神奈川県立近代美術館鎌倉別館での展示

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>大谷省吾                                 | 4. 巻<br>25            |
| 2. 論文標題<br>『ニッポン新聞』にみる北脇昇の思考の軌跡                | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>東京国立近代美術館研究紀要                        | 6. 最初と最後の頁<br>24-34   |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）          | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>大谷省吾                                 | 4. 巻<br>9             |
| 2. 論文標題<br>Photo-dessins et collages d' Ei-kyu | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>revue A                              | 6. 最初と最後の頁<br>39-44   |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難         | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>西澤晴美                                 | 4. 巻<br>-             |
| 2. 論文標題<br>それぞれのリアリズムに向かって 戦中・戦後の女性画家たち        | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>「生命のリアリズム 珠玉の日本画」展図録（神奈川県立近代美術館）     | 6. 最初と最後の頁<br>97-100  |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難         | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>大谷省吾                                 | 4. 巻<br>28            |
| 2. 論文標題<br>日本アヴァンギャルド美術家クラブをめぐる                | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>近代画説                                 | 6. 最初と最後の頁<br>74 - 92 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難         | 国際共著<br>-             |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>大谷省吾                         | 4. 巻<br>24            |
| 2. 論文標題<br>瑛九から山田光春への書簡 1938 - 1955年   | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>東京国立近代美術館研究紀要                | 6. 最初と最後の頁<br>26 - 50 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著<br>-             |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>五十殿利治                         | 4. 巻<br>-           |
| 2. 論文標題<br>ワルワラ・ブノワの「戦後風景」について          | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>「ブノワさんの絵画」図録 (早稲田大学会津八一記念博物館) | 6. 最初と最後の頁<br>5 - 8 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし          | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-           |

|  |                  |
|--|------------------|
| 1. 著者名<br>西澤晴美                         | 4. 巻<br>-        |
| 2. 論文標題<br>作品解説 山口勝弘《ヴィトリヌNo.37》       | 5. 発行年<br>2019年  |
| 3. 雑誌名<br>「ふたたびの近代」展冊子 (神奈川県立近代美術館)    | 6. 最初と最後の頁<br>10 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無       |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-        |

|   |                   |
|---|-------------------|
| 1. 著者名<br>大谷省吾                            | 4. 巻<br>629       |
| 2. 論文標題<br>「物質」をキーワードに瀧口修造と日本の前衛美術について考える | 5. 発行年<br>2018年   |
| 3. 雑誌名<br>現代の眼 東京国立近代美術館ニュース              | 6. 最初と最後の頁<br>6-7 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし            | 査読の有無<br>無        |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)    | 国際共著<br>-         |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>五十殿利治                        | 4. 巻<br>34          |
| 2. 論文標題<br>「山口勝弘日記」(仮称)の調査研究について       | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>藝叢 筑波大学芸術学研究誌                | 6. 最初と最後の頁<br>25-27 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子)<br>なし          | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|  |                   |
|--|-------------------|
| 1. 著者名<br>西澤晴美                                     | 4. 巻<br>-         |
| 2. 論文標題<br>山口勝弘日記から見えてくるもの                         | 5. 発行年<br>2022年   |
| 3. 雑誌名<br>「山口勝弘展 『日記』(1945-1955)に見る」図録(神奈川県立近代美術館) | 6. 最初と最後の頁<br>3-7 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                      | 査読の有無<br>無        |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難             | 国際共著<br>-         |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>大谷省吾   | 4. 発行年<br>2021年     |
| 2. 出版社<br>筑波大学出版会  | 5. 総ページ数<br>217-240 |
| 3. 書名<br>『筑波大学アート・コレクション 石井コレクション 美をめぐる饗宴』所載「天と地をつなぐ光 石井コレクションの瑛九作品について」 |                     |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>西澤晴美   | 4. 発行年<br>2021年     |
| 2. 出版社<br>筑波大学出版会  | 5. 総ページ数<br>323-345 |
| 3. 書名<br>『筑波大学アート・コレクション 石井コレクション 美をめぐる饗宴』所載「福島秀子の1950年代の創作活動について」 |                     |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



6. 研究組織

|                   | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                         | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                        | 備考 |
|-------------------|---|--|----|
| 研究<br>分<br>担<br>者 | 西澤 晴美<br><br>(Nishizawa Harumi)<br><br>(50639854) | 神奈川県立近代美術館・その他部局等・研究員<br><br><br><br>(82715) |    |
| 研究<br>分<br>担<br>者 | 五十殿 利治<br><br>(Omuka Toshiharu)<br><br>(60177300) | 筑波大学・芸術系(特命教授)・特命教授<br><br><br><br>(12102)   |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |